

## 実証！続けることが一番の近道

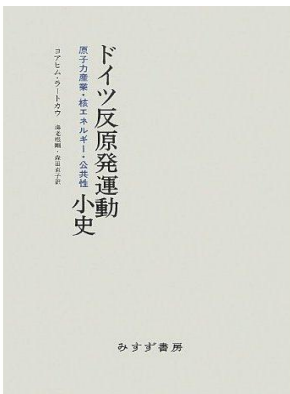
2011年3月11日のことをまだはっきり覚えているだろうか。日本人にとって非常に衝撃的な日だった。大地震後の津波と原発による大災害。多くの人が津波によって命を落とし、後世に長く残るであろう被害を原子力の事故によって被った。負の経験をした日本はなぜ未だに脱原発を決断することが出来ないのだろうか。この問いを考えるうえで大いに貢献するが本書である。彼は脱原発を成功したドイツの反原発運動の歴史を紐解くことで、日本の反原発運動は決して孤立していないということをそしてどんなに小さな反対運動であ

っても決して希望を失わないようにとメッセージを発している。

「いまや日本の原子力の批判者たちは、ひとりぼっちだと感じる必要がない」という強いメッセージを軸にし、ドイツの原発とそれを取り巻く反原発運動の歴史を複数の転換期、すなわちアメリカにおける前史、ドイツにおける初の市民によるデモが起きたヴィールから抗議運動が成功したゴアレーベン、スリーマイル原子力発電事故が起きた1979年、チェルノブイリ原発事故そして福島原発事故などを挙げ、大まかな

歴史の流れがわかりやすく的確に述べられている。また核エネルギーというものがそもそもドイツではどのような地位を占めていたのかということについて惜しげもなくドイツ内部の事情を暴露している。そこで焦点となっているのは、経済的・政治的利益追求と矛盾し始めた原子力産業である。政府は安全だと信じて原子力を産業として発展させてきたが、チェルノブイリ事故によってその「安全神話」は崩壊した。政治的・経済的利益追求と原子力産業の両者の距離が離れていく経過を見ることができる。さらに排他的だったドイツの原子力産業界がいかに市民の活動グループに妥協をしてみたのかを明確にしている。すでに長い間存在してきた潜在的危険と潜在的不安がチェルノブイリ事故によって浮き彫りになり、反原発運動の今までの努力や取り組みが日の目をみることに間近かであることを印象付けた。

ドイツの反原発運動を決断した要因を「運動の粘り強さ」にあるとし、原子力にかわる将来のエネルギー政策に関して彼が日本人に勧めることは「複数のエネルギー政策のオプションを徹底的に検証してみることに」だった。できるだけ多くの選択肢を事前に想定しておくことで、もし一つの道が失敗に終わっても大丈夫であるような状態を作り出すことが重要であると著者は言う。



ドイツが40年以上もかけてようやく決断した脱原発。日本が今すぐそれを成せるとは全く思わない。しかし大切なのは、ドイツにおいて40年もの間に少しずつではあっても脱原発への政治的・社会的準備や市民の脱原発への思いが育まれていたことにある。どれほど小さくゆっくりした流れでも、それを長年続ければ主流と変化しうることを、ドイツは世界にありありと見せつけたのだ。

本書の特徴としては第5章がインタビュー形式になっている点あげられる。まずこの第5章を先に読むことを勧める。そうすればより容易にドイツ原発の歴史が理解できるであろう。

## 目次

第1章「あれから一年、フクシマを考える」

第2章「ドイツ反原発運動小史」

第3章「核エネルギーの歴史への問い—時代の趨勢における視点の変化(‘75~‘86年)—」

第4章「ドイツ原子力産業の興隆と危機1945~1975年」

第5章「原子力・運動・歴史家—ヨアヒム・ラートカウに聞く—」

(写真) <http://www.amazon.co.jp/>

演習(日独社会研究2)

紹介者: H. R.